

AFTER THE GREEK AFFAIR

by Chantelle Shaw

Copyright © 2011 by Chantelle Shaw

All rights reserved including the right of reproduction in whole or in part in any form. This edition is published by arrangement with Harlequin Enterprises II B.V./ S.à.r.l.

® and TM are trademarks owned and used by the trademark owner and/or its licensee. Trademarks marked with ® are registered in Japan and in other countries.

*All characters in this book are fictitious.
Any resemblance to actual persons, living or dead,
is purely coincidental.*

Published by Harlequin K.K., Tokyo, 2012

ベル・アンダーセンはバッグから携帯電話を取り出し、メールをもう一度読んだ。送信者はラリッサ・クリスタキス。彼女の兄ルーカスが所有するギリシアの島への交通手段を説明する内容だった。

〈結婚式はアウラ島で挙げる予定なので、事前に島にいらして、雰囲気を感じ取ったうえでドレスのデザインをしていただけたら、本当に素晴らしいと思うの。まずはアテネのラヴリオン島からケア島行きのフェリーに乗ってね。到着の時間をあらかじめ知らせていただけたら、ケア島へお迎えの船を手配しておきます〉

フェリーは十分前にケア島に到着し、最後の乗客もすでに下船している。埠頭の先のほうでは、漁船が何艘かのんびりと揺れている。雲一つない空を映したコバルトブルーの海は鏡のように穏やかだった。コリツシア港と呼ばれるこの港には、絵のように美しい風景が広がっている。テラコッタ色の屋根のある四角い家々が港を囲み、その白壁が日差しに輝く。家並みの向こうには緑の丘がなだらかな曲線を描き、色鮮やかな野の花が咲き乱れていた。

アーティストとしてのベルは、風景の美しさに感動していた。とはいえ、アテネまで四時間のフライトと、六十キロ離れた港への移動、さらに一時間のフェリーの旅を経たあととあって、今はひたすら目的地に到着するのが待ち遠しかった。

ひよっとしたらあの漁船のうちの一艘が、私を迎えに来た船かもしれない。ベルはそう思い、目の上

に手をかざして強い日差しをさえぎりつつ、埠頭を見渡してみた。漁師の一団がなにやらおしゃべりに興じているが、だれもこちらのほうを見ようともしない。フェリーのほかの乗客たちはすでにちりぢりになり、街へと消えてしまった。ベルはため息をつき、スーツケースを持ちあげて、漁師たちのいるほうへ歩きだした。

五月の日差しの温かさは心地よかった。住まいがあるロンドンはこのところ季節はずれの寒さに見舞われているが、ここはまるで別世界だ。来週一週間ほどギリシアに滞在すると告げたときの兄の顔を思い出し、ベルはくすくと笑った。兄のダンは、テムズ川に浮かぶおんぼろのハウスボートに一人取り残されるのがいかにも不満そうだった。

「楽園みたいなプライベートアイランドでギリシアの大富豪とよろしくやっていても、たまには哀れな兄のことを思い出してくれよ」ダンはこちらから半分

に言っていた。「おまえがこんがり日焼けしている間に、せつせと船の水もれの修理でもしているからまあ、そういう僕も、近いうちにまたウェールズに写真を撮りに行くつもりだけどね」

「私だって仕事なのよ。のんびり日光浴をしに行くわけじゃないわ」ベルは言い返した。「それに、ルーカス・クリスタキスとは顔を合わせることもほとんどなさそうよ。ラリッサの話では、お兄さんはアテネの本社のオフィスにいるか、出張で世界各地を飛びまわっているかのどちらかみたいだから。ラリッサの結婚式の日取りだって、ルーカスのスケジュールに合わせて決められたのよ。あいていたのは六月の最後の週末だけだったみたい」

埠頭の先へと足を運びながら、ベルは眉根を寄せた。ラリッサとの会話には兄の名前が頻繁に登場した。彼女が兄を慕っているのは明らかだ。けれどその一方で、ルーカス・クリスタキスはかなり独善的

な性格だという印象を受けた。ラリッサは兄に威圧され、言いなりになっているのではないかしら。

そもそもベルがこの急ぎの仕事を引き受けることになったのも、ルーカスが原因だった。ラリッサのウエディングドレスと花嫁付添人二人分のドレスのデザインと製作には、通常なら半年の期間を与えてもらうところだが、今回は特別に五週間で仕上げることになった。もちろん、ラリッサが最初に委託したデザイナーが個人的な都合で仕事を放棄し、姿をくらましてしまったことまではルーカスのせいではないだろう。ラリッサから話を聞いたわけではないので詳しい事情はよくわからない。けれど、ウエディングドレスが準備できないにもかかわらず、ルーカスが式を予定どおり六月末に執りおこなうと言ってゆずらなかつたため、ラリッサは窮地に追いこまれたのだ。一週間前、ベルの店へウエディング・ベルを訪ねてきたとき、ラリッサは今にも泣きだし

そうな顔をしていた。ドレスは必ず間に合わせるよベルが約束すると、ラリッサは心底ほっとしているようだったが。

できるだけ早くアウラ島に来てデザインに取りかかってほしいと言ったとき、ラリッサは声を震わせていた。それほどおびえていたということ？　ベルの眉間のしわがさらに深くなった。ルーカス・クリスタキスとはまだ顔を合わせてもいないが、会う前から嫌いになりそうだ。

いいえ、こんなことではいけないわ。ベルは自分に言い聞かせた。ジョン・タウンゼンドに対する憎しみのせいで、ほかの男性にまで先入観を抱くのは間違っている。独善的な男を父親だと信じこまされて育ったからといって、ルーカスも同じタイプと決めつけるべきではないのだ。ラリッサの兄は案外魅力的な人物かもしれない。ゴシップ誌の情報によれば、美しい愛人たちが群れをなして彼を取り巻いて

いるらしい。それが真実だとすると、ルーカスに魅力を感じる女性はおおぜいいるようだ。

そのとき、はるか遠くの海上に動く影が見え、ベルは足をとめた。スピードボートと呼ばれる高速のモーターボートが、白く泡立つ二本の軌跡を描きながら、港へ近づいてくるところだった。ボートは埠頭に接近するにつれ速度をゆるめた。低いエンジン音がのどかな静寂をかき消す。輝きを放つパワフルなボートは埠頭にいる者たちの視線を一身に集めていたが、ベルの目を釘づけにしたのはその舵を取る男性だった。心臓が肋骨を突き破らんばかりに激しく打ちはじめた。

ラリツサから迎えるの船を手配すると知らされたとき、まさかルーカス・クリスタキス本人が現れるとは想像もしなかった。これまでベルが新聞や雑誌で目にした写真は、彼の本当の魅力を十分の一も伝えていない。たしかに写真は、豊かな黒髪やきりりと

引き締まった顔立ち、角張った顎やセクシーな唇をとらえてはいたが、彼の全身にみなぎるむき出しのパワーをとらえてはいなかった。まさにオーラとも呼ぶべきそのパワーは、人の視線を引きつけたきり、射すくめたように動けなくしてしまう。

「君がベル・アンダーセンか？」彼はギリシア風のアクセントのある英語でベルに声をかけた。その声は低く、ほんの少ししゃがれている。あまりにも男らしい声に、ベルの全身は総毛立った。熱が血管を駆けめぐり、素肌がふいに敏感になったように感じられた。

「え、ええ」自分でも恥ずかしいほどすつとんきょうな声が出た。スピードボートが岸壁に横づけされ、もやい綱が係船柱に結びつけられる間、ベルは胸を高鳴らせて見守っていた。

「ルーカス・クリスタキスだ」ボートから飛びおりると、彼は大腿でベルのほうに近づいてきた。自信

に満ちた足取りは、これほど大柄な男性にしては、驚くほど優雅だった。身長はゆうに百八十センチを超えているだろう。引き締まった腰と長い脚は、色あせたジーンズに包まれている。ぴったりフィットした黒のＴシャツ越しにも腹筋が発達しているのがわかる。Ｖネックの胸元にはブロンズ色に焼けた肌と黒い胸毛がのぞいていた。

ベルはごくりと唾をのんだ。男性をこれほどまでに意識したのは生まれて初めてだ。心臓は早鐘のように打ち、てのひらに汗がにじんでいる。差しさわりのない天気の話でもして緊張をやわらげたかったが、口の中がからからに乾いて言葉が出てこないばかりか、脳の機能が完全に停止してしまっているようだった。彼がサングラスをかけていなかったら、これほどまでに威圧感を受けることはなかったかもしれないと思つたものの、すぐに大差はないだろうと思ひ直した。

やがてようやくこれは仕事なのだと思ひ出し、精いっぱい落ち着いた口調を装って挨拶をした。「お会いできて光栄ですわ、ミスター・クリスタキス。ラリツサからお噂はうかがっています」

ベルが差し出した手をルーカスが握るまで、ほんの一瞬、間があつたような気がした。それとも、単なる気のせいだろうか。彼は短く力強い握手をした。目の前に立ちはだかる体は日差しを完全に遮断してしまふほど大きい。ベルはふと考えた。この広い胸に抱き締められたらどんな感じかしら？

ルーカスはベルの手を放したが、代わりに今度は腕をつかんだ。ベルは驚いた。「僕も会えてうれしいよ、ミズ・アンダーセン」その挨拶はおざなりな印象だった。どこことなくいらだっているような口調でもある。「話したいことがあるんだ。どこか座る場所をさがそうか？」

そしてベルの返事も待たず、あいている手で大き

いほうのスーツケースをつかみ、彼女の肘を押すようにして歩きだした。向かつている先は、通りをはさんだバーのようだ。店の前のストライプの日よけの下に、テーブルが並んでいる。八センチのヒールの靴ではルーカスの大きな歩幅についていくのがやっとならなかつた。まるで親に無理やり引きずられている子供みたい。ベルは腹立ちまぎれに彼をにらみつけたが、結局は文句の一つも言えないでいるうちに、彼が引いた椅子に座らされていた。

ルーカスはテーブルの向かい側にまわり、腰を下ろした。観光客にとっては、港を行き交う船を眺めながらのんびりとくつろげる心地よい場所なのだろうと、ベルはむっとしながら思った。でも、こっちはギリシアに遊びに来たわけじゃないのよ。とにかく、一刻も早く仕事に取りかかりたかった。

「ミスター・クリスタキス——」

「なにか飲むかい？」ルーカスはそう尋ねると、テ

ーブルのそばに立っていたウェイターに早口のギリシア語でさっさと注文した。ベルが聞き取れたのは「レツイーナ」という言葉だけ。松脂まつやにが入ったギリシア独特の白ワインのことだ。

「私にはジュースをお願いします」ベルは即座に言った。

ウェイターはルーカスの顔を見た。まるで、彼女の注文に従ってもいいか、彼に許しを求めているかのような顔だ。

ベルはいらだたしげに腕時計に目を落とした。今朝自宅を出発してから、すでに八時間がたっている。暑さと疲労でげんなりし、王様気取りの男性の機嫌を取っている余裕などなかった。「ミスター・クリスタキス、私は飲み物なんかありません。それよりもまっすぐアウラ島に連れて行っていただきたいわ。妹さんから依頼されて、一カ月そこそこでウエディングドレスを作らなければならぬんですもの。一

分一秒でも早く仕事に取りかかりたいのよ」

「ああ」ルーカスはサングラスをはずし、値踏みするようなまなざしをベルに向けた。「僕が話したいのは、実はそのことなんだ」彼のグレーの瞳は火打ち石のような冷たい光をおびている。折れるということを知らない目だと、ベルは思った。そして、その表情に歓迎の色がかけらも見えないことにながかりしている自分に気づいた。ばかね。こつちが意識しているからって、向こうも同じとは限らないでしょう？　そもそも、そんなことを望むこと自体がどうかしているわ。必死になつて頭からその考えをかき消し、まっすぐにルーカスの目を見た。太く黒い眉、力強い鼻筋、やや厚めの唇。顎にうつすら生えた無精髭^{ひげ}までもがセクシーな魅力を増幅させている。眺めているだけで、彼女の鼓動は乱れた。

あの唇に触れられたら、どんな感じなのかしら？　最初はゆっくりともてあそぶように味わい、やがて

は情熱をむき出しにして唇を重ね合わせたら？　そのようすをあまりにも鮮明に描き出していることに、自分でも驚いた。頬がかつと熱くなる。

ルーカスはいぶかしげに目を細めていた。まさか、こんな想像をしていることに気づかれてしまったのでは……。とまどうあまり、ベルの頬の赤みはいっそう増した。かしげた首の角度から、ほとんどぶしつけとも言えるほどじろじろ見つめてくる視線まで、彼のすべてが傲慢^{うご}さに満ちていた。自分が女性にどんな影響を及ぼすか、知り尽くしているのだろう。ベルは今すぐこの場から消えてしまいたいほどみじめな気持ちだった。

まったく、人生というやつは、思いがけないタイミングで妙ないたずらを仕掛けてくるものだ。ルーカスはいらだちまぎれにそう思いながら、正面に座っている女性の赤らんだ頬を見つめた。計画を変更

したから君はもう妹のドレスをデザインする必要はないとベル・アンダーセンに言い渡し、旅費と手間賃を補ってなお余りある高額の小切手を渡し、アテネに戻る次のフェリーに乗せる——それはいとも簡単な用事のはずだったが、さつさと片づけるところか、青い瞳に射すくめられたように動くことすらできずにいる。その瞳は矢車草の色で、長いしほみ色のまつげに縁取られていた。彼女の表情にはどことなく傷ついたような陰りが感じられ、いつそう興味を惹かれた。

ベル・アンダーセンがこれほど美しいとは想像もしていなかった。さらに驚いたのは、自分自身の反応だった。ルーカスのまわりには常に美女たちがあふれていた。ファッションモデルや社交界の花たちとつき合ってきたので、おのずと目も肥えている。もっと言えば、彼はすらりと背が高く洗練されたタイプの女性が好みだった。ベルは小柄で、人形のよ

うに愛らしい。けれど、埠頭に立つ彼女の姿をひと目見た瞬間から目が釘づけになり、今もその端正な顔から視線を離すことができずにいる。

ベルの顔の造りは、まさに完璧だ。鮮やかなブルーの瞳と、小さく形のいい鼻。高い頬骨と、柔らかなようなピンクの唇。髪はつば広の帽子に隠れて見えないが、北欧系のような色白の肌から考えて、金髪であることはほぼ間違いないだろう。黒い縁取りのあるクリム色の帽子は、仕立てのいいスーツのデザインにぴったりだ。黒いエナメルのハイヒールとハンドバッグも含め、寸分の隙もないコーディネートだった。

この五〇年代風のエレガントなスーツも彼女自身のデザインなのだろうか？ だとすれば、彼女のデザインナーとしての能力について不安を感じる必要はないかもしれない。ルーカスは少しの間、その可能性を考えてみたものの、すぐに頭から追い払った。

ベル・アンダーセンの実力は未知数だ。昨晚、ラリッサから新しいデザイナーを雇ったという知らせを聞き、すぐに調査してみたが、ヘウエディング・ベルなるウエディングドレス専門店は昨年度の収益がほとんどなく、資本金もお粗末なものだった。言い換えれば、ベルの会社もまた経営が逼迫ひっぼくしているということだ。ラリッサが最初にドレスのデザイナーを委託したヘデマキス・デザインと同じように。

結婚式の五週間前になってもまだ妹のウエディングドレスが用意できていないことに関して、ルーカスは責任を感じていた。ギリシア人デザイナー、トウーラ・デマキスのことを事前に調べていれば、彼女の会社が経営難に陥り、倒産寸前だったことくらいはすぐにはわかったはずだ。けれど、ラリッサがトゥーラにドレスを注文したときルーカスは国外に出張中で、妹が代金を全額前払いしたことも知らなかった。

デザインを依頼したのは半年も前のことだが、結婚式が近づくにつれ、トウーラ・デマキスは次から次へと突拍子もない言いわけを並べて、ドレスの製作が遅れている弁解をしはじめた。嘆かわしいことにラリッサは彼女の言いわけを信じこみ、トウーラがドレスの代金もろとも行方をくらませるまで、この問題をルーカスに報告することはなかった。

妹がこれほどまでに世間知らずなのは僕のせいなのだろうか？ ルーカスはふと考えた。だが、妹の存在は彼にとつてすべてだった。彼女が幼いころからずっと父親代わりを務めてきたせいか、過保護になっっていることは否めない。とはいえ、結婚式がおよそ一カ月後に迫っているとあって、さすがに妹一人にまかせてはおけなくなつた。そこで友人に頼んで、世界的に有名なデザイナー、ジャクリン・ジエムスにラリッサのドレスの製作を依頼した。妹がすでに別のデザイナーに頼んでいることは、昨

晩初めて知ったのだ。

トウーラ・デマキスが詐欺師同然だったからといって、ベル・アンダーセンのことまで疑うのは不当かもしれない。しかし、妹とは違い、ルーカスは他人を信じないことにしていた。これは過去の痛い経験から学んだ教訓だが、仕事のうえでも私生活でも役立つ。たとえばベル・アンダーセンが信頼に足るデザイナーだとしても、結婚式が目前に迫った今、ラリツサが再び裏切られるような可能性は完全に排除しておかなくてはならない。

ルーカスは椅子の背にもたれ、ベルの繊細な顔立ちをじっと見つめた。たまらなく魅力的だ。だが、今考えるべきは妹のことだけだ。ベル・アンダーセンにどれほど惹かれるものを感じようと、そんなものはこの際なんの関係もない。いずれにせよ、次のフェリーに乗せて送り出してしまえば、彼女のことなど二度と思い出しはしないだろう。まあ、多少残

念ではあるが。違う状況のもとで出会っていたなら、ためらうことなく彼女をベッドに誘い入れていただろうが……。

お願いだからそんなふうに見つめないで。じっとそがれるルーカス・クリスタキスの視線に、ベルはいたたまれない気持ちになっていた。ジュースが運ばれてくると、気をまぎらせた一心でグラスを口に運んだ。

「やつぱり喉が渴いていたんじゃないか」ルーカスは冷ややかに言った。

ついさつき飲み物はいらなと言ったことを思い出し、ベルの頬はまたかっとなつた。「朝からずっと移動しているんです」彼女は言い返した。

冷ややかなグレーの瞳が彼女の目を射るように見た。「それはご苦労だった。そんな君に、むだ足だったと伝えるのは酷なんだが、ここは率直に話すし

かない。妹はウエディングドレスの製作を別のデザイナーにまかせることにしたから、君に来てもらう必要はなくなつたんだ」

数秒の間、ベルはあつげに取られ、目をまるくしてルーカスの顔を見ていた。「でも……」

「君が費やした交通費と時間を補償するよ。これで足りるかな」ルーカスは平然と先を続け、財布から取り出した一枚の紙片を彼女に渡した。

ベルはぼんやりとその小切手を手に取つた。黒いインクで記された数字は、彼女の旅費の百倍を超える額だが、それによつて胸を締めつけられるような落胆がやわらぐことはなかった。「よくわからないわ」つぶやくように言った。「ラリツサからメールが届いたのは、つい昨日のことなのよ。私にドレスをデザインしてもらふと思うとわくわくする、来てくれるのがとても楽しみだと書いてあつたわ。メールを送つたあとで気が変わったということなの？」

ルーカスが口を開く前にほんの少しためらつたのを、ベルは見逃さなかつた。だが、彼の口調は落ち着いていて、礼儀正しくさえあつた。「残念ながらそういうことだ」

ベルはなんと言つたらいいかわからなかつた。みぞおちに強烈なパンチをくらい、体じゅうの力が全部抜けてしまつたかのようだ。ラリツサが心変わりするとは、とても信じられなかつた。小切手を見つめていると、視界が涙でかすみはじめた。

どうしてこんなことで泣くの？ 自分をたしなめた。けれど、今回の依頼は、ベルにとって大きなチャンスだつた。ラリツサの結婚式は今年の社交界で最も注目される式になるはずだからだ。

ルーカス・クリスタキスはギリシアでも有数の富豪に数えられる。貧しい家の出であることを考えれば、驚くべき出世だ。本国では国民的ヒーローのように扱われ、彼が土地開発会社を設立したアメリカ

では、有名人として名をはせている。ラリッサの結婚式には、政財界の名士とうたわれる人々は一人残らず招待されているという。

「招待客リストの半分は、私が今まで会ったこともない人たちなのよ」ラリッサはベルにこう言っていた。「正直言つて、もっとどこちんまりした式のほうがよかつたんだけど、兄は私にとって生涯忘れられない式にしようと思つてくれているみたい。文句を言つたら罰が当たるわね」

世界的な注目を浴びる結婚式で花嫁のドレスをデザインすれば、ヘウエディング・ベルにメディアの関心が集まることは必至だ。またよちよち歩きの店を軌道にのせ、ローンの一括返済を迫る銀行を黙らせるためには、またとない機会だった。

しかし、ベルの落胆は、単に店を繁盛させるチャンスを失つただけではなかつた。ラリッサとは最初に会ったときから意気投合した。さらに、一人

目のデザイナーが行方をくらましたという話を聞き、心から同情を覚えた。ロンドンの店を訪ねてきたラリッサは、ベルのデザイン集に見入っていたかと思うと、ビンテージもののフランス製レースやマラボーと呼ばれる装飾用のはげごうの羽毛を手にとって、菓子屋に来た子供のようになれしそうに目を輝かせていた。夢中になつているラリッサの姿を見ていると、最高のドレスを作ろうという熱意がおのずとわきあがつてきたものだ。あの日から今日にいたるまでの間に、どんな心境の変化があつたというのだろう？ どうも腑に落ちない。ベルは鬱々とした気分であらう。

そのときふと、店に来たときのラリッサの言葉を思い出した。ブルーカスはジャクリン・ジェイムスンに依頼しようと言っているの。

ベルももちろんその名前は知っていた。ジャクリン・ジェイムスは世界じゅうの有名人に人気の

デザイナーだ。昨年の権威ある映画賞の授賞式では、ベルの見た限り少なくとも四人のハリウッド女優が彼女のドレスをまもっていた。ラリッサに、ジャクリーン・ジェイムスンではなくベル・アンダーセンのドレスで式を挙げたいと言われ、どんなお世辞よりもうれしく思ったのだが、最後の最後で気が変わったということなのだろうか。あるいは、兄の意見に押しきられたか……。

ベルは目の前に座る男性に疑いのまなざしを向けた。ルーカスは顎にぐっと力を入れ、鋼色の瞳に決然とした光をたたえている。彼が妹に、自分の趣味を押しつけたのかしら。これまでのラリッサの話からすると、ルーカスは妹の結婚式を我が物顔で取り仕切り、自身の成功をひけらかす場として利用しようとしているようだ。そう考えれば、彼が世界的に有名なデザイナーを選ぶようラリッサを説得したとしても不思議はない。

事の真相を知るには、方法は一つしかない。ベルはラリッサに直接尋ねようと思ひ立ち、バッグの中から携帯電話を取り出した。

それを見てルーカスは身をこわばらせ、眉根を寄せた。「どこに電話するんだ？」

「私はあなたの妹さんと約束したの」心中は穏やかではないものの、口調は精いっぱい落ち着きを保つて言った。「だから、ほかのデザイナーを選んだことに本当に満足しているのかどうか、直接確かめたいのよ」ベルはそこでいったん口をつぐんだ。険しいグレーの瞳に見つめられ、背筋を震えが走った。「もちろんそれも、妹さん自身の決断なら、ということね。ほかのだれかに強要されたのだとしたら言語道断だわ」

2

「妹を巻きこむ必要はない」

ルーカスが手を伸ばし、ベルの手から携帯電話を奪い取った。彼女は息をのみ、あわてて取り返そうとしたものの、彼の動きはすばやく、すでに手の届かないところへ遠ざけられてしまっていた。思いきりならみつけても、ルーカスは眉一つ動かさない。

「いったいどういうつもり？ 返してください。だいたい、ラリッサを巻きこむ必要はないってどういうこと？ この件にだれよりもかかわるべきなのはラリッサじゃないの。大事なのは、彼女がなにを求めているかでしょう？」

ベルの憤慨した口調に、ルーカスはむっとして目

を細めた。遠い昔、彼は貧しい移民の子として、ニューヨークの貧民街に住んでいた。しかし今は、世界に名だたる事業家として、会う者すべてが目の前にひれ伏すのが当たり前になっている。まともに稼ぐこともできない針子などにくってかかられるのは、けっして愉快なことではなかった。

「妹にとつてなにかいぢばんいいのかはよくわかっている。ミズ・アンダーセン、失礼を承知で言うが、それは君ではないんだ」

ラリッサの気持ちが本人よりもよくわかっているというの？ ルーカスのあまりに傲慢な言葉に、ベルは目をしばたいた。もともと、驚くほどのことではない。ルーカス・クリスタキスは、その冷徹さで知られた男だ。行く手を阻む者は容赦なく排除し、今の地位までのしあがってきたという評判だった。

ルーカスは肉食獣が獲物を品定めするような目でベルを見ていた。ベルは落ち着かない気分になった

ものの、独善的な男の言いなりになるのだけはいやだった。ジョン・タウンゼンドが実の父ではないとわかり、ようやく自由になることができたのだ。今後は相手がだれだろうと、いっさいおしげづくまいと心に決めていた。

「ラリツサは気が変わったりなんかしていないのね。そうでしょう？」ベルは問いつめた。「ジャクリン・ジェイムスンに依頼するって、あなたが勝手に決めたのよ。でもどうして？ 私の作品を一度だっ て見たことはないじゃないの。私にはラリツサの理想にぴったりのウエディングドレスを作れないって、どうして言いきれれるの？」

ルーカスは奥歯を噛み締めた。腹立たしいことに、彼の中でうしろめたい気持ちの頭をもたげていた。ベルの言うことにも一理ある。「ああ、君の作品を見たことはない」

ベルは怒りを覚えつつも、ふとルーカスの広い肩

に目を向けた。日ごろから鍛えているのだろう。筋肉がくつきりと際立った腕に目を落としたとき、ベルはおなかの奥がぎゅつと締めつけられるような感覚を覚えた。彼の肌はブロンズ色で、腕は黒い毛でおおわれている。あのたくましい腕に抱きすくめられたら、どんな感じなのかしら？ 頭の中で小さな声がささやくのを聞き、たまらなく落ち着かない気分になった。

ルーカスの話はまだ続いている。ベルは彼のセクシーな体から会話の内容へとなんとか注意を引き戻した。

「たしかに君の言うとおりだ。僕自身が、ジャクリンにデザインを依頼したいと考えている。ジャクリンは世界的に有名なデザイナーというだけでなく、僕の個人的な友人でもある。一方、君に関しては名前すら聞いたことがない。僕が知る限りでは、〈ウエディング・ベル〉は設立されてからわずか三

年だ。率直に言わせてもらえば、時間的な制約も厳しい中で、君に最高級のウエディングドレスをデザインできるかどうか、それだけの経験があるか疑わしい」

「できるわ。チャンスさえ与えてくれたら」ベルは身を乗り出し、ルーカスをじっと見つめた。「ラリツサの夢のドレスを作りあげるために寝る間も惜しんで働く覚悟はできています」相手が険しい表情を崩さないのを見て、彼女はいらだたしげにかぶりを振った。「ラリツサは私を選んでくれたのよ。それを無視していいわけがないわ。彼女はもう大人なんだから、自分のことは自分で決める自由があるはずよ。彼女の人生の大事なことを代わりに決めてしまおうなんて、あなたにいったいなんの権利があるの？」

「最初のデザイナーに裏切られたとき、妹はひどく気落ちしていた。それを何日もかかって慰めた身と

しては、妹が二度とつらい目にあわないようにしてやる権利はあると考えている」ルーカスは突っぱねるように言った。「今回の仕事でまとまった金が入ることを期待していたんだろうが、むだ足を踏ませてしまったことについては、こうして十分な額を支払おうと言っているんだ」

ベルは手にした紙切れに目を落とした。「つまり、この小切手は口止め料というわけね？」ギリシアへの航空券代どころか、豪華客船で世界一周旅行ができるほどの額を、なぜルーカスが支払おうとするのか不思議に思っていたが、これでわかった。「このお金を持って、さっさとイギリスに帰れと言いたいんでしょ。そうすればラリツサも、これだけ時間的制約がある中で、ジャクリン・ジェイムスンにドレスを頼むしかなくなる。あなたの思いどおりになるということよね。あきれたわ」ベルはさげすむような目で彼を見た。「そこまで支配欲が強いなん

て、異常よ」

ルーカスが木製のテーブルをたたく音が銃声のように響き、ベルはびくつとした。「妹を守ろうとすることに關して、君に謝罪しようとは思わない」彼は怒りに満ちた表情で言った。「妹はトゥーラ・デマキスを信じたが、あの女の関心は、妹から金をしぼり取れるだけしぼり取ることにしかなかった。結婚式はすでに五週後に迫っている。これ以上ラリッサががっかりするのを見たくはないんでね」

頑としてゆずらないルーカスの態度を見て、ベルの気持ちは沈んだ。「たしかにヘウエディング・ベルは、当初私が期待していたほど繁盛していないわ」彼女は正直に言った。「でも、どの業界だってこの不況のせいで苦労しているのは同じはずよ」

三年前、専門学校を卒業してしばらく大手のウエディング専門会社に勤め、そこを退職して母が遺したくれたわずかな遺産でアトリエの一年分の家賃を

払った。生き馬の目を抜くようなファッションデザイナーの世界でおまえなんかやっついていけるはずもないとジョンに意地悪な言葉を浴びせられても、ベルの樂觀的な気持ちが揺らぐことはなかった。あの男になんと言われようと関係ない。ジョンが自分の父でないとわかって以来、ベルはその支配から完全に自由になった。もう二度とあの男に人生を左右されまいと決意していた。

なぜ男性の中には、あらん限りの権力を行使しなければ気がすまない者がいるのだろうか？ベルは理解に苦しみつつ、ルーカスの傲慢な表情をちらりと見やった。妹を守りたいのだと彼は言う。しかしベルには、彼がジョン・タウンゼンドと同じように、まわりの人間を意のままに操らなければ気がすまない頑固者にしか見えなかった。この男性を説得しようとしても時間のむだだ。そう思っても、アトリエを訪ねてきたときのラリッサのはしゃいだようすを

思い出すと、もうひと押ししてみなければ気がすまなかつた。

「世間から注目を浴びる結婚式の仕事をするなんて、私の店にとつてはまたとないチャンスだわ。でも、私がラリッサのドレスを手がけたい理由は、それだけじゃないの」ルーカスのげげんそうな顔つきは無視し、ベルは身を乗り出した。「私はこの仕事が好きなのよ。単なる生活の手段じゃない。情熱のすべてをつぎこむ生きがいなの。たとえばラリッサの式がマスコミの関心とは無縁のこぢんまりしたものだったとしても、私をデザイナーとして選んでくれた以上、喜んで取りかかったと思うわ」

ベルは手にした小切手を半分に引きちぎり、^{ズガガ}残骸をテーブルに置いてルーカスのほうに押し出した。

「お金には興味はありません。ラリッサのドレスをデザインしたいのは、彼女が好きだからよ。アトリエを訪ねてきてくれたとき、会った瞬間から意気投

合したの。彼女にアイデアを披露しながら、こっちまで胸がわくわくしたわ」ベルはルーカスの鋼色の瞳をまっすぐに見た。彼女の瞳は、相手をなんとか説得しようという意欲と^{しん}真摯な熱意に輝いていた。「私にチャンスをください、ミスター・クリスタキス。妹さんをがっかりさせるようなことはぜったいしないと約束するわ」

ベルの瞳は夏空を思わせる鮮やかなブルーだった。ルーカスの視線は彼女の愛らしい顔に釘づけになった。まるで魔法にかかったように、目をそらすことができなかった。彼女が話すときの生き生きとした表情や、言葉を強調しようとする手ぶりに、完全に魅了されていた。ベルを見ていると、繊細で美しい^{ちやう}蝶が頭に浮かんだ。ヴィラの壁をおおうブルーゲンビアの周囲でよく見かける種類の蝶だ。手を伸ばしてつかまえようとしたら、するりと指をすり抜け、逃げてしまいそうな気がした。

僕はなぜこんなばかげた想像をしているんだ？

ルーカスはいらだちを覚えながらも、すっかりベル・アンダーセンのとりこになっていた。なにか見えぬ力に引き寄せられるように、テーブル越しに身を乗り出していた。彼女はさつき、仕事に情熱のすべてをつぎこむと言っていた。だが、情熱という一語を聞いただけで、頭の中でベルが自分のベッドに横たわっている姿を想像してしまう。ほっそりした彼女の肢体は一糸まとわず、顔は薔薇色にほてり、美しいブルーの瞳は欲望に陰っている。

ベルの肌は磁器のようになめらかだった。柔らかそうなピンクの唇はほんの少し開いている。今すぐキスしたい衝動をこらえるのは至難の業だった。二人の間にはセクシャルな緊張がみなぎっていた。バーのほかの客たちの声は遠のき、ルーカスの意識は目の前のベルの存在しかなかった。

「ミズ・アンダーセン、君は結婚しているのか？」

ベルははっとして目をぱちくりさせた。セクシーな気分にくつりとひたつていたところを、ルーカスの言葉でいきなり現実に取り戻されたのだ。店内で食器が触れ合う音や、埠頭を飛び交う鷗たちの声がかたまた聞こえてきた。

私だったら、どうしちゃったの？ ベルは目を閉じ、胸いっぱい空気を吸いこんだ。心臓は早鐘のように打っている。ほんの一瞬、ルーカスがキスしてくるのではないかと思い、息をつめていた。彼の顔はとても近くにあつて、彼が言葉を発したとき、その吐息が彼女の唇を撫でたほどだった。ベルのほうは彼がそのわずかな距離をつめ、唇を重ねてくるものと半ば期待して、無意識のうちにキスを待っていた。そのあげくキスしてくれなかったので、一人取り残されたような気がしてしまったほどだった。

「い、いいえ……してないわ」ベルはつぶやいた。そして、二人の間にある得体の知れない濃密な空気

を断ちきるかのように体を起こし、椅子の背にもたれた。「なぜそんなことをきくの?」

「君の情熱の対象が……」ルーカスは一瞬言いよどみ、彼女の唇を見つめた。「ウエディングドレスになったのは、自分が花嫁になったときの体験がきっかけなんじゃないかと思っただけだよ」

ベルは首を横に振った。「私の情熱の対象は、デザインと創造全般なの。歴史的なものからヒントを得ることも多いわ。目下のところは、ルイ十六世の時代のヴェルサイユ宮殿ね。あの放逸なほどの豪華さに惹かれてるの。十八世紀のフランスの美術史で最も注目すべき遺産の一つだもの。これまでに何度も足を運んでアイデアを得ては、自分のデザインに取り入れてきたのよ。頭に浮かんだイメージを具現化して、この世のものとは思えないほど美しくて、なおかつ着心地のいいドレスを作りたいと思ってるの。大切な日に、花嫁には気持ちよく過ごしてほ

しいし、ドレスがちゃんと動きについてくるというのがわかれば、自信を持って……」そこではつとして口ごもり、しゃべりすぎてしまったことに気づいて苦笑いした。十代の女の子ならともかく、大人のキャリアアウーマンはこんなふうにあつぽく語ったりしないものだ。彼女は照れながら言った。「まただわ。仕事のことになると、つい我を忘れてしまつて……」

しばらくの間、沈黙があつた。ベルは二人の間に再び濃密な空気が戻ってきているのに気づいていた。それはまるで残り火のように、今にも赤々と燃えあがりそうだ。ベルの全神経はルーカスにそがれ、彼の息遣いのかすかな乱れやほのかなコロンの香りにいたるまで、すべてを感じ取ろうとしていた。胸の鼓動はますます速まり、頬が熱くほてっている。血管を伝って、熱が全身を駆けめぐっているかのようだ。私つたら、いったいどうなつてしまったの?

魅力的な男性なら、これまでだって何人も会ったことがある。けれど、これほどの衝撃を受けたのは、ルーカス・クリスタキスが初めてだ。

デザインにかけるベルの情熱は本物のようだ。彼女の愛らしい顔から目が離せないまま、ルーカスは思った。未知のデザイナーだからといって敬遠せずに、ラリッサの判断にまかせるべきだろうか？

「妹はどうやって君のことを知ったんだ？」彼は唐突に尋ねた。

「ファッション誌の『スタイル・アイコン』に掲載された私のドレスの写真を見たんですって」

ルーカスは目をまるくした。「あの『スタイル・アイコン』に注目されるのは、僕が思っていたよりも名が知られているようだ。世界屈指の販売部数を誇るその道のバイブルのような雑誌じゃないか」「たまたま運がよかっただけなのよ。兄があの雑誌のウエディング特集のカメラマンをまかされたの。

兄の名前はあなたもひょっとしたら聞いたことがあるかもしれないわ。ダン・タウンゼンドって知らない？ ファッションカメラマンとしてけっこう名が売れているのよ。特集記事に掲載されるはずだったデザイナーのうちの一人が土壇場でキャンセルしてきたものだから、ダンが代わりに私の作品を使うように『スタイル・アイコン』の編集者を説得してくれたの」

ルーカスは知らず知らずのうちにベルの話に引きこまれていた。彼女の私生活など知ったことではないと思いつつも、むしろにもっと知りたくてたまらなくなった。「どうしてお兄さんと姓が違うんだい？」

ベルは答えるべきかどうかためらい、べつに恥ずかしいことではないと自分に言い聞かせた。浮気してきた子供だからって、私のせいじゃないわ。姓を変えるのは、彼女自身が決めたことだった。自分の

出生の秘密を知ったとき、ベルはタウンゼンドから母親の旧姓であるアンダーセンに改姓する手続きを取ったのだ。

「父親が違うのよ」

ジョンが実の父親でないを知ったとき、ベルが唯一悲しく思ったのは兄とは半分しか血が繋がっていないことだった。だが兄のほうは、悲しむ必要はないと言つてベルを慰めた。『半分しか血が繋がっていないなくても、おまえが僕の妹だつてことに変わりはないよ。おまえだけでもあの世界一不愉快な男の血を引かずにすんだんだから、むしろ喜ぶべきだ。ただ、気の毒に思うのは、母さんが僕の父親との結婚生活から抜け出せなかつたせいで、おまえが本当の父親を知らずに育つたつてことだな』

今となつては、実の父親をさがすのは不可能だった。ベルの母親は不倫相手の男性について生前にも明かさず、その秘密は母親の死とともに葬り去ら

れた。そして母親の葬儀の日、ジョンは突然、ベルが血のつながった娘ではないと明かしたのだ。以後三年間、手がかりはなに一つないというのに、実の父親はどんな人なのかと、ベルは想像ばかりめぐらしていた。

母のグッドルーンが本当のことを話してくれていたら……。再び無念さがこみあげそうになり、ベルはあわててその考えを頭から振り払つた。母を恨んでみたところでどうにもならない。あれほど慕つていた母親に対し、裏切られたような思いを抱くのは間違っている。母は母なりに、私がジョン・タウンゼンドを父親と信じて育つほうが幸せだと判断したのだ。

けれど、ジョンとの結婚生活を続けることは、母にとつてつらい選択だつたに違いない。ジョンは、離婚したらもう二度と息子には会わせないと脅したそう。自分のもとにとどまるのなら、浮気の末に

身ごもった子供を我が子として育てることに同意したという。

子供をたてに母親を脅すなんて、あまりにもむごすぎるとベルは思った。グッドルーンは女としての幸せよりも息子を選んだ。だが、そのせいでベルは、父親と信じる人になぜ自分が嫌われているのかわからないまま、みじめな子供時代を過ごすはめになった。それにしても、なぜこうもややくいしい展開になってしまったのだろうか？ すべては、母が間違った男性と結婚したせいには違いない。母が遺した日記を読むと、ジョンとの結婚後わずか二、三カ月でそれが間違いであったと気づいたことがうかがえた。しかし、そのころすでにダンを妊娠していたため、愛のない結婚から抜け出すことができなくなってしまったのだ。

私はぜったいに同じ過ちは犯さない。ベルは心に決めていた。美しくロマンチックなウエディングド

レスをデザインすることは大好きだけれど、一人の男性にすべてを明け渡してしまうなんてまっぴらだ。中でもルーカス・クリスタキスのような男性は、相手として最悪だわ。テーブルの向かいにいるルーカスをちらりと見やりながら、彼女は思った。とはいえ、男らしいいきりとした顔を見たとき、胸がきゅんと締めつけられた。彼はこれまで目にした中で最もハンサムな男性だ。その気になれば、カリスマ的な魅力を發揮して、女たちを魅了することもできるのだろう。けれど、私の好みからいえば、あまりにも支配的で荒々しい。今まで父だと信じて育ってきた男と同類に思える。

とにかく、これ以上説得しようとしても時間のおぼだだ。きつく引き結ばれたルーカスの口元を見て、ベルは思った。落胆が鉛のように胸に重くのしかかり、今すぐ、この不機嫌な男のそばから逃げ出した衝動に駆られた。ジュースの残りを飲みほし、グ

ラスをテーブルに置くと、バッグを手にした。「わかりました、ミスター・クリスタキス。おっしゃるとおりにします。次のフェリーでアテネに戻れば、今夜のロンドン行きの際に間に合うかもしれませんわ」そこでいったん言葉を切り、おぼろげと尋ねた。「でも、私がなぜデザインを担当できなくなったか、ラリッサに伝える言いわけを考えてもらえないかしら。身内に急病人が出たとか、そういうことでどう？ ラリッサに、私が単に約束をすっぽかしたと思われたくないの。あなたはたぶんそう言うつもりなんでしょ」責めるような口調で言い添える。ルーカスはすぐには答えなかった。沈黙が続く中、鋼色の瞳は無表情で、なんの感情も浮かべていないやがて彼はようやく口を開いた。「ラリッサにどう思われるか、気になるのか？」

「当然でしょう。妹さんにとってはかわいいなだけわ。私が最初のデザイナーと同じようにがっかりさせた

なんて思われたくないの。出すぎたまねだというのを承知で言わせていただければ、彼女の人生をあなたの思いどおりにしようとするのは間違っているわ。たとえそれが彼女の幸せを願ってしたことでもね」ルーカスにらみつけられても、ベルはかまわず続けた。「妹さんを守ることと、彼女を支配しようとすることとは別だと思うの。自ら下した決断をあなたがじゃましていると知ったら、ラリッサはあなたを恨むようになるかもしれないわ」

「君の言うとおりに、まったくもって出すぎたまねだな」ルーカスはうなるように言った。ベルの言葉は彼の神経を逆撫でた。ラリッサを支配しようとしているわけじゃない。ただ、妹には最高のものを与え、大切にしてやりたいだけだ。両親にそう約束したのだから。

ルーカスはいつしか、遠い記憶をたどっていた。それは彼の魂に刻まれた記憶だ。おまえは今日か

ら一人前の男になるんだ。母さんとラリツサの面倒を見てくれ。頼んだぞ”父の声はかすれていた。腹部に開いた弾痕だんこんから勢いよく血が流れ出ると同時に、父の命も肉体を離れようとしていた。コカインでハイになった二人の若者に銃で撃たれたのだ。当時、ルーカスはまだ十六歳だった。自分が背負わされる責任の重さにおびえ、大好きな父を失う悲しみに愕がく然ぜんとしていた。

二年後、今度は母親がルーカスの手を握り締めて別れを告げた。やせた母の腕は、静脈の一本一本が透けて見えるほどだった。癌がんが発見されたときにはすでに手遅れで、健康保険も金もなく、わずかな延命をもたらしてくれる薬さえ手に入れることはできなかった。死はまたたく間に訪れた。”ラリツサをお願いね”母はそうささやいて息を引き取った。母のベッドのわきに立ち、なすすべもなく見送っていたルーカスは、去りゆく母に、妹を必ず幸せにする

と約束した。

ベル・アンダーセンにながわかる？ ルーカスは怒りを覚えた。十八歳の若さで六歳の妹の全責任を負わなければならなくなった者の気持ちなど、彼女には想像すらできないはずだ。僕の人生の道は険しかった。自分に生き抜く力があるかどうかかわからず、不安で眠れない夜が何度もあった。

ラリツサに対して過保護になるのは当たり前だろう。怒りにまかせてルーカスは思った。父が目の前で殺されるのを目撃し、この世の中がどれほど危険か思い知らされたのだから。とはいえ、彼女が言うように、ラリツサが兄の善意をよけいな干渉ととらえ、恨みがましく思う可能性も否定できない。ベルの指摘の言葉が、ルーカスの心に引つかかっていた。ベルがウエディングドレスをデザインしにアウラ島に来てくれると言ったときの妹のはしやぎぶりが思い出された。

ルーカスは心の中で毒づいた。たしかに、ラリッサの意思を尊重すべきだというベルの言い分には一理ある。ラリッサももう一人前の女性なのだから、そろそろこちらは一歩引いて、見守ってやるべきなのかもしれない。だいいち、問題など起こりようがないだろう？ ベル・アンダーセンは、ひとたびアウラ島へ渡れば、僕の監視のもとに過ごすことになるのだ。本人はラリッサのドレスを仕上げるために寝る間も惜しんで働くと言っている。彼女にその約束を守らせればいいだけのことはないのか？

ルーカスの視線は再びベルの口元に引き寄せられた。あのピンクの唇を奪うことを想像しただけで、欲望に身がこわばれるのを感じる。彼女に対し、焼けつくような激しい欲望を抱いていることを否定するつもりはない。しかし、それだけではない。興味深いことに、もしもこちらの直感が正しいのなら、ベルのほうも二人の間に働いている強い引力に気づい

ているはずだ。

ベルは席を立ち、手を差し出しながらきびきびした口調で言った。「電話を返していただけか。航空会社に電話して、帰りの便の変更ができるか確認したいの」

ルーカスはサングラスをかけ、ゆっくりと立ちあがってから、ベルの手に携帯電話を置いた。彼の指はほんの数秒でのひらに触れただけだったが、接触した部分がうずき、その感覚が腕のほうまでのぼってくるのをベルは感じた。彼女はあわてて手を引つこめ、あやうく電話を落としそうになった。体じゅうがほてっている。末梢神経の一本一本にいたるまで、彼を意識して震えている。しっかりと。ベルは自分に言い聞かせた。感覚のすべてをこの男性に占領されてしまったように腹立たしかった。

ルーカスはやたらと背が高かった。こうして二人とも立ちあがると、彼の大きさに、みなぎる強さに、

そしてむき出しの純粋な男らしさに圧倒されそうになる。家に帰ることになって、むしろよかったのかもしれない。身を震わせながらベルは思った。ルーカスの前では自分の体の反応を抑えることができない。ジャケットの下では、胸の先までもが刺激を受けたように硬くなっている。

ベルは頬を赤らめ、胸元を隠すように腕組みしながら携帯電話の画面をスクロールし、発信履歴から航空会社の番号をさがそうとした。

「アウラ島にたどり着きたければ、ごちゃごちゃやっついていないで一緒に来るんだ」

ベルが手をとめて顔を上げると、ルーカスはすでにスーツケースの大きいほうをつかんで歩きだしていた。彼女は啞然^{あぜん}としながらも、残された小さいスーツケースを手にはを出した。

「ちよっと待って……」ルーカスは大股にすたすたと進み、すでに通りの向こうへと渡っている。ベル

はめまいがするほど高いヒールをはいてきたことを後悔しつつ、でこぼこした石畳の道をよろよろと進んだ。「どういふことなの？」

ようやく彼に追いつき、冷ややかな目で見おろされたとたん、心臓がどきんと打った。なんてハンサムなのかしら。こんな場面にもかかわらず、そう思わずにはいられなかった。そんな自分がたまたまなく恥ずかしかったが、がっしりした骨格の顔から目を離すことができない。

「フリッツサのドレスを作らせてくれるということかしら？」彼が百八十度方針を変えたことに、すっかり面くらっていた。「私がお金目当てに妹さんをだますんじゃないかと心配しているんじゃないの？ そのトゥーラとかいうデザイナーがしてみたに、お金だけしぼり取って消えるだろうと疑っているんでしょう？」不当に扱われたことへの怒りが、まだ胸の中でくすぶっている。

「いや、その心配はしていない」二人はすでに埠頭の突端に到達していた。ルーカスはベルのスーツケースをボートに投げ入れてから彼女のほうに向き直った。「君がラリツサの夢見る最高のウエディングドレスを仕上げて、妹を幸せにしてくれると確信しているよ。もしできなければ……」ルーカスが浮かべた笑みを見て、ベルは背筋がぞくつとした。「この僕がただではすまさない」

「私を脅す気？」あまりにも傲慢な彼の態度に腹を立て、喧嘩腰で尋ねた。腰に手を当てて、視線を合わせるために精いっぱい顔を上げながら、自分の身長が低いのが悔しくてならなかった。

「警告しているだけだ」ルーカスは平然と答えた。「もしラリツサの期待に^{こた}えられないようなことがあれば、この先、地球上のどこへ行こうとへウエディング・ベルへの資金的な支援が得られないよう手配するから、そのつもりでいてくれ」

ルーカスは本気で言っているのだと、ベルは思った。彼の財力と権力をもってすれば、それくらいはわけないだろう。私のささやかな会社など、靴底で蟻^{あり}を踏みつぶすように、簡単につぶされてしまうに違いない。

「それで、来るのか？ 来ないのか？ 日が暮れるまで君の決断を待っているほど暇じゃないんでね」
嘲^{あざわら}るような口調に憤慨しながらルーカスのほうを見ると、すでにボートに乗りこみ、手を差し出し飛びおりたほうがましだと思えたが、この仕事^{がけ}がどうしても必要なはまぎれもない事実だった。銀行のローンの返済を滞^{おそ}らせたままでは、ルーカスが手を下すまでもなく、へウエディング・ベルは倒産するだろう。

ハイヒールとタイトスカートでは、ルーカスの手を借りずにボートに乗りこむのは不可能だ。ベルは

しぶしぶ身を乗り出し、彼の手をつかんだ。次の瞬間、業を煮やしたルーカスがベルのウエストをつかみ、軽々と地面からかかえあげた。ベルは小さな悲鳴をあげた。

ルーカスの胸に抱かれていた数秒間、ベルは頭の中が真っ白だった。彼のたくましい胸板と岩のように硬い腿が素肌に密着し、体の芯が熱く締めつけられるような感覚を覚えた。ボートの床に足が着いたところでようやく息を吸い、動揺を隠すために彼をにらみつけた。「どうもご親切に、ミスター・クリスタキス。でも、こんなことをしていただかなくても、ちゃんと自分で——」

「冗談だろう？」ルーカスはベルの言葉をさえぎった。「そんなばかげた靴をはいて、生まれたての子馬みたいによろよろしているじゃないか。それから、僕のことにはルーカスと呼んでくれ。妹に、君がアウラ島で過ごしやすいように気を配ってくれと言われ

ている。ファーストネームで呼び合うくらい親しくなつてほしいというのがラリッサの希望なんでね、ベル」

ルーカスが自分の名前を呼ぶのを聞いたとき、その口調のなにごうさせるのかはわからなかったが、ベルの全身を震えが走った。続いて彼が浮かべた愉快そうな笑みを見て、息がとまった。ただでさえセクシーな口元がカーブを描くと、膝の力が抜けるほど魅力的な笑顔ができあがった。ベルの心臓は長距離を走つたかのようにどきどきしていた。

「風に飛ばされる前に、脱いでおいたほうがいい」ルーカスはベルのつば広の帽子をつまみあげた。中から金色の髪があふれ出し、彼女の腰の近くまで、きらめく滝のように流れ落ちる。彼は一瞬、はっとして動きをとめた。ブロンドだろうと予想はしていたが、こうして日の光を浴びると、ほとんどプラチナに近いほど淡い色に見える。こんな髪の色が自然

に存在するとはとても思えない。ベルは彼の胸から
いまでの背丈で、彼の目からは彼女の頭皮がよく見
えた。根元に近いところが濃い色であることに気づ
き、ルーカスは納得した。

そよ風が、ベルの顔にひと筋の髪を吹きつける。

ルーカスはその髪を彼女の頬から払いのけた。ベル
は時間がとまったような気がした。彼の深いグレー
の瞳をのぞきこんだとき、それはもはや冷たくも陰
しくもなく、むき出しの情熱にあふれていた。今す
ぐ抱き締めて、激しく唇を求められたい——そんな
危険な考えが彼女の脳裏をよぎった。

いやなところばかりが目につく相手なのに、なぜ
こんなに惹かれてしまうの？

きつとこれは肉体的な相性の問題なのだ。私のあ
ずかり知らないところで、体が勝手に欲しているだ
けなのだろう。これから一週間、大恥をかかずに過
ごしたいと思ったら、ルーカスへのこんな反応はな

んとか抑えこまなくては……。そうでなければきつ
と、熱に浮かされた十代の小娘のように、失態を演
じてしまうことになる。

ボートのエンジンのうなりが全身を揺るがし、ベ
ルは座席の端をつかんだ。ルーカスはスロットルを
全開にし、猛スピードでボートを進めていく。行く
手にあるのは、青い海に浮かぶ緑の宝石のような美
しい島だ。髪を風になびかせながら、ベルはケア島
のほうを振り返った。とたんに不安がこみあげ、パ
ニックを起こしそうになった。ルーカス・クリスタ
キスの領土である島にひとたび足を踏み入れたが最
後、自分の人生が一変し、二度と引き返せなくなる
のではないかという気がした。

この続きは書籍でお楽しみください！サンプルV



情熱から始まる関係

2012年6月5日発行

著者	シャンテル・ショー
訳者	片山真紀(かたやま まき)

発行人	立山昭彦
発行所	株式会社ハーレクイン
	東京都千代田区外神田 3-16-8
	電話 03-5295-8091(営業)
	03-5309-8260(読者サービス係)

印刷・製本	大日本印刷株式会社
	東京都新宿区市谷加賀町 1-1-1

造本には十分注意しておりますが、乱丁（ページ順序の間違い）・落丁（本文の一部抜け落ち）がありました場合は、お取り替えいたします。ご面倒ですが、購入された書店名を明記の上、本社読者サービス係宛ご送付ください。送料本社負担にてお取り替えいたします。ただし、古書店で購入されたものについてはお取り替えできません。®とTMがついているものはハーレクイン社の登録商標です。

Printed in Japan © Harlequin K.K. 2012

ISBN978-4-596-12743-3 C0297

